

北海道中央ユーラシア研究会 第105回例会

重税がアルバニアのイスラーム化を促進したのか
—オスマン朝期ジズヤ研究の課題と展望—

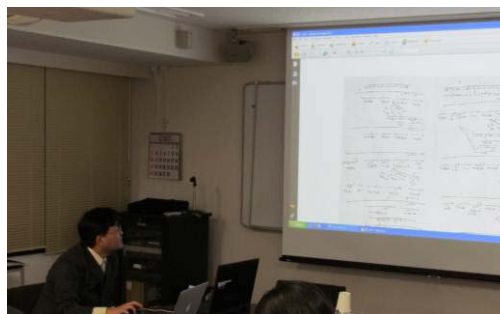
今野 毅

(北海学園大学非常勤講師)

日 時：2013年2月27日(土) 16:45-19:00
場 所：北海道大学スラブ研究センター4階小会議室 401
討論者：長縄宣博(北海道大学スラブ研究センター准教授)
司会者：宇山智彦(北海道大学スラブ研究センター教授)
出席者：10名

<報告要旨>

本報告の目的は、オスマン朝が作成したジズヤ(非ムスリムに課せられた人頭税)に関わる文書群の分析に基づき、これまでのジズヤ研究の課題と展望を概観した上で、15-17世紀アルバニアにおける徴税世帯(hane. 成年男子の家長を単位とする)もしくは成丁(nefer)に課せられたジズヤの税額の変動を明らかにし、これらの情報の分析がイスラーム化を考察する手掛かりとなりえるか考察することにある。



社会主義体制下のアルバニアでは、オスマン支配には否定的な評価が与えられており、イスラーム化は他の地域に比較して著しく「高額なジズヤ」が課せられていたことが要因とされていた。そのため、実証的研究は主にアルバニア国外の研究者によって進められ、15世紀以降に在地有力者の間で、16世紀に都市部で、そして17-18世紀に農村部でイスラーム化が進行したことが明らかになった。なお現在のアルバニアでは、典拠の不明な「高額なジズヤ」説をはじめとするオスマン支配への否定的評価は、再検討の余地があるものとされている。

一方、オスマン朝行政文書に基づくジズヤ研究はブルガリア・トルコ・ユーゴスラビア・ハンガリーといった国々ではじまる。勅令・法令といった一枚ものの文書類と財政関係の台帳類を利用した研究により、納税額が君主のファトワに基づいて毎年決定され、ジズヤからの収入が国家財政の2割から5割を占めていたなど、その具体像と重要性が明らかになった。また、ジズヤの納税者数から非ムスリム人口を算出する試みはバルカン半島の人口動態研究に大きく寄与した。しかしながら、担税者の実態、税額とその変化の具体例の提示、地域間の比較など、研究には様々な課題が存在する。特にイスタンブールの総理府オスマン文書館所蔵に所蔵されている膨大なジズヤに関わる台帳群については、ほとんど未調査のままであった。

そこで報告者は、総理府オスマン文書館の15-18世紀のジズヤに関わる台帳群を検討し

たところ、以下の傾向が明らかになった。第一に、ジズヤ簡易帳（特定地域の担税者の合計数とその納税総額のみを村毎に記録した台帳）の形式が、17世紀中葉以降大きく変化したこと。第二に、Erkam 台帳（帝国全土の司法裁判区或いは徴税区毎に、その総収入額のみを記録するとされていた）には、徴税世帯もしくは成丁毎の課税額に言及されていること。加えて、ジズヤ徴税割当台帳と呼ばれる、従来知られていなかった台帳群（ジズヤ徴税官に任命された人物についてその徴収額とその内訳を任地毎に記録）の存在が認められた。

次いで、徴税世帯或いは成丁に課せられたジズヤの税額が明記されている15-17世紀のアルバニアを扱った台帳群について、その残存状態を報告するとともに税額の変遷を整理し、以下の点を明らかにした。第一に、税額は当初徴税世帯毎に異なっていたが、1590-1600年代を境に全徴税世帯に一律同額の税が課せられるようになったこと。第二に、1580年代と比較すると1590-1610年代の税額は少なくとも2倍から最大5倍になっており、1620年代にやや減税されていること。このような変化の背景には、対オーストリア戦争(1593-1606年)、対サファヴィー朝戦争(1603-12年)、そしてインフレーションの影響が窺えよう。第三に、1620年代以降1680年までのジズヤの税額をみると、1620年代初頭わずかに増加し、1630年代後半から1650年代後半にかけてさらに1割から3割の増加がみられた。しかしながらこの時期における税率の増加は1590-1610年代に比較すると急激なものではない。また、税の増加率をみると、非ムスリム人口が多数を占めるとされるコルチャなどの地域とそれ以外の地域とはほぼ等しい。ゆえに、イスラーム化がジズヤの増額により促進されたとは言えないのではないかと結論にいたった。

今回の報告は、アルバニアのイスラーム化とジズヤとの関係を考察するという点では、不十分なものとなった。しかし、総理府オスマン文書館のジズヤに関わる史料群を検討し、長期にわたるジズヤの税額の変化を提示しえた点に意義があろう。今後は、オスマン朝やアルバニアをめぐる情勢が税額の増加にどのように影響しているのか、さらに考察するとともに、1691年ジズヤ改革以降の税額の変化、アルバニア以外の地域における税額との比較、そしてジズヤ以外の税などについて検討することで、イスラーム化の問題はもちろん、15-18世紀の人口動態の分析にも着手していくことにしたい。

【記：今野】

<参加記>

報告に引き続いて、ロシア帝国におけるムスリム社会の歴史を専門としている長縄宣博氏より次の様なコメントがあった。

本報告は、重税がイスラーム化の進展を促したかどうかを検討するものであり、具体的な史料が提示された点で意義のあるものである。一方、いくつかの疑問点も浮かんでくる。

それは、第一には本報告ではジズヤに注目しているが、現地エリートに土地を分け与えるティマール制から見たイスラーム化の様相



とジズヤのそれとを比較して何が言えるのか。第二には、アルバニアという地域がオスマン帝国においてどのような地域特性を持っているのか。第三には、イスラーム化は、オスマン帝国中央による国策レベルの施策といえなくはないか。同時代のロシア帝国では、非ロシア人エリートの改宗が積極的に政策として実施された。また、オスマン帝国によるアラブ地域の征服やサファヴィー朝との競合という時代背景において、オスマン帝国の国家的な性質の変遷をジズヤのような税制面と関連付けて論じられるのではないか。第四には、微細な視点として、アルバニアやバルカン内での、ジズヤの徴税状況の地域的な差はあるのだろうか。第五に、徴税官はどのような人々が担っていたのか、といったものであった。

これに対し、報告者からは、各問いかけに対して、次のような応答があった。

第一の問いかけに対しては、先行研究ではジズヤの徴税額の増減をイスラーム化の指標として利用しており、今回はこれを参考とした。また、史料論の立場から答えれば、ティマール制にかかわる史料は社会のエリート層を研究することに向いており、一方ジズヤを扱う税台帳は社会の下層の実態を検討することに適している。本報告では、市井の人々の実像を見て行きたい学問関心から、ジズヤに着目した。

第二のアルバニアの地域特性については、帝国の辺境であり、ハプスブルク帝国との前線地帯でもあって、貧しい地域である。そのため、アルバニアの人々は中央で傭兵として活躍する機会が多い。また、アルバニア内部でも、平地と山間部では差が大きい。ジズヤのような一般税制は、この地域の地域統合のような面で用いられたと考えている。

第三の、マクロな視点に立った問であるが、特に 17 世紀にはアラブやサファヴィー朝を意識して、帝国内を引き締め、イスラーム化を進める意図はオスマン帝国中央には存在したであろうが、この中央の政策とアルバニアでのジズヤとの関係性については現在未検討である。第四のミクロな地域差については、今後社会経済史や国家財政の視点で検討を加えて行きたい。第五の徴税官であるが、中央の軍人や宮廷関係者である。

続いて、フロアとの質疑応答では以下の様な議論が交わされた。

参加者の一人からはコメンテーターとの議論を踏まえ、次のようなコメントと質問がなされた。ティマール制とジズヤの関係性については、ティマール制に直接関わる支配層がイスラームに改宗したならば、被支配層である下層の人々も自ら徐々に改宗が進んでいくはずなので、税台帳のみならず他の史料も組み合わせながらイスラーム化の実態を検討していくべきではないか。その上で、アルバニアにおけるキリスト教徒とムスリムの税額の差はどれほどあったのか。

これに対しては、外交官やキリスト教教会の史料を検討していることや、詳細な税額は不明だがキリスト教徒のほうが税額は多いといった回答がなされた。また、いわゆる隠れキリシタンの、表面的改宗者が多い地域でもあるので、この点も考慮しなければならぬとのことであった。

また別の参加者からは、税額とインフレーションの関係や、オスマン帝国税制全体の中でのジズヤの位置付けを問うものや、イスラーム化の進展に伴って生じるジズヤの税収減への対応はどのようになされたのかといった質問がなされ、活発な議論が行われた。

かつて、バルカン諸国によるオスマン帝国地代に関する歴史叙述に関心をもっていた筆者としては、時代背景に囚われないで一次史料と真正面から向き合い、議論を展開する本報告は、オスマン帝国統治下のバルカンの実像を描く大きな研究に結びつくと感じられた。

今後、本報告を起点として、マクロな歴史叙述がなされることを期待して止まない。

【記 :中嶋哲平(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)】